インフルエンザ流行本格化

苫保健所「感染拡大」注意喚起

全道で感染者が増加しているインフルエンザは、苫小牧保健所管内（東胆振1市4町）でも5日に今季初の注意報が出され、本格的な流行期に入った。苫小牧市内の小中学校では学級閉鎖も相次ぎ、同保健所は「学校など集団生活をする場では急激に感染が広がりやすい。長期休みに入るまで十分に注意を」と呼び掛ける。

小学校で今季初の学級閉鎖となったのは10月20日。大成小学校（児童224人）は同23日付で保護者向けに感染対策を呼び掛けるプリントを配布した。同26～29日に1年生の1学級を閉鎖したが、円山芳文校長は「他学年にまで拡大せず、早い時期に収まった」と胸をなで下ろす。しかし集団感染は繰り返し起こる可能性があり、11月2～6日には各学年で「風邪学習」を実施。手洗い・うがいや換気、規則正しい生活などの感染対策を改めて指導した。

同保健所は「ワクチン接種も感染や重症化予防に効果がある」としている。苫小牧市保健センターは10月1日からワクチン接種を始め、11月6日までに例年と同程度の3023人が接種した。国立健康危機管理研究機構（東京）の調査によると、9月以降国内で検出されたインフルエンザウイルスは9割以上がA型で、過去にも多く流行したpdm09というタイプ。苫小牧東病院（明野新町）の感染管理認定看護師嶋倉昌貴さん（43）は「現在のワクチンにも想定型として採用されている」と解説する。



苫小牧市保健センターで行われているインフルエンザワクチン接種

嶋倉さんは、特に学校や保育施設で過ごす時間が長い子どもについて、「家庭内の感染の発端となることも多く、小児のワクチン接種は積極的になされるべき」と話す。成人の発症予防効果は40～60％程度で、高齢になるとさらに下がるが、重症化や死亡リスクが高い高齢者には子ども同様、積極的な接種を勧めている。（神部造）